

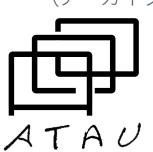
イベント概要

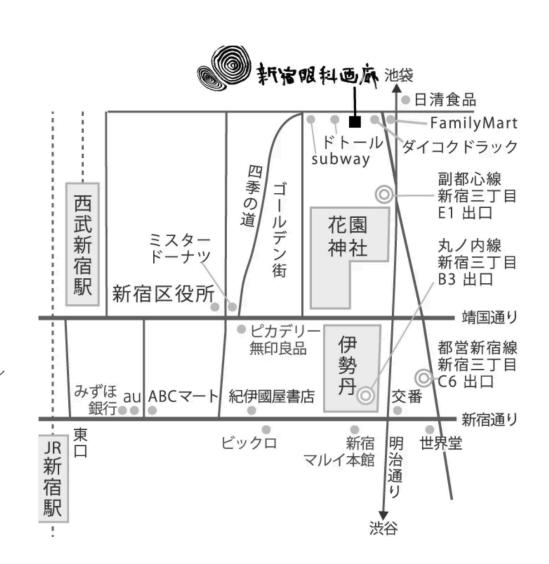
• 会場:新宿眼科画廊地下

https://www.gankagarou.com/ +オンライン配信

(YoutubeLive予定、無料配信)

- 会期:8月27日~9月1日 (12時~20時、 8月27日のみ18時~20時)
- イベント形態:
 2時間ごとに15分間のパフォーマンス(ライブ配信)計21公演予定
 +過去パフォーマンスの映像展示(アーカイブ配信)

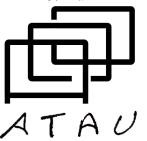




東京藝大「I LOVE YOU」プロジェクト2020採択公演

『ATAU-能う/与う-』とは

- ・ 東京藝術大学が2020年に「芸術は人を愛する」をコンセプトに 主催する「I LOVE YOU」プロジェクトの採択公演として、神田川が 所属する藝大COIロボットパフォーミング・アーツグループが実施す る、展示+公演+配信イベントです
- タイトルの『ATAU-能う/与う-』は、「デジタル技術という"道具"が これからの芸術表現に"与"えること/不可能から可"能"にすること」 というコンセプトから名付けたものであり、そこに科学分野におけ る時間の記号 τ (タウ) から「ひとつの(共有の)時間」を意味す る「 $a\tau$ (ア・タウ)」という意味を付け加えて今回の講演タイトル としました
- 当初は「"デジタルの身体性"の(再)発見」をテーマに、舞台芸術における即興表現とデジタル技術によるアートの交点を探る公演になる予定でしたが、コロナ禍によって、当初のプランは困難となりました
- ・ そこで我々は、即興パフォーマンスをデジタル技術で"重畳"し、複雑に重ねられた表現のレイヤーによって「おなじ15分」をすべての共演者が共有し、継承し、更新してゆく、「コロナ時代の舞台芸術」を探る試みによって、すべての舞台が受けた困難に挑戦します





パフォーマンス概要(導入/ポエム)

静寂がある。照明がつく。客席がざわつく。舞台に一歩を、ふみだす。「なぜ生で、舞台なの?」……舞台芸術に関わるひとは、

たぶん何百回と訊かれることだろうと思う。

回答も(何百とは言わないけれど)いくつもあるだろう。

客席との一体感。多くの人が関わることで生まれる化学反応。 舞台上の共演者から受けて・与える影響関係。

「いま・ここ」でしか生まれ得ない、一回性。

どれもとても素敵なものだ。録音技術が、撮影手法が、

事後の加工と編集による芸術がこんなにも進展した21世紀にあって、

未だに素朴な「板」の上に執着する理由は、そこにある。

そんな、「どれも・とても・素敵な理由」は、 今年、奪われ、禁止され、困難になっている。 人権への侵害でもなく、文化への攻撃でもなく、 生命かどうかすらあやふやな存在によって。 照明も、客席も、舞台もなく。いま、ただ静寂だけがここにある。

「板」の上を奪われたわれわれは、それでも「舞台」への憧れを 忘れられずに、いくつかの代替品に、苦し紛れに手を出している。 オンライン、配信、無観客.....。

いずれも困難の時代に、不安を乗り越えるために必要なものだ。 水中で息を求めるように。

けれど、もともとは「舞台芸術」のためなんかじゃないそれらは、 たとえば無視できない遅延の、たとえば共演者たちの影響の欠如の、 たとえば存在感の希薄さの、

それぞれに深刻な問題を抱え、困難をより深めてしまっている。

なにもかもを望むことはできない。

「板」と「客席」のある空間を追われた私達は、 何かを諦めることでしか「舞台」に触れられない。 それがコロナという呪いだ。

劇場の扉は釘で打ち付けられてしまったのだから。棺のように。

……けれど、その困難と不安の大きさの前に、 われわれはあまりになにもかも諦めてしまってはいないか? 遅延なく共有される「時間」を、

「あなた」から「わたし」が受け取る影響の連鎖を、「いま・ここ」を。 閉じられた劇場の扉の前で、手放す以外の選択肢が、まだあるはずだ。 ……きっと。

まだ何もかもが楽観的だった頃、

この企画の申請書に「デジタル技術という道具がこれからの芸術表現に "与"えること、不可能から可"能"にすることを明らかにしたい」と書いた。

.....そうだ。

舞台上で起こるあらゆることのなかで、 時間と空間を共有することの不可能性に対してなら、 デジタル技術にできることがまだ残っているはずだ。

たとえば、同じ「はじまり」と「おわり」を持った、 同じ長さの時間を、同じ舞台装置の上で過ごすことで。 たとえば、そこで行われた過去の表現の断片を、 見、聞きながら、その影響を引き継ぎ、 また新しい表現に繋げてゆくことができるのではないか。 舞台上に浮かぶ「幽霊」のようなわれわれは、 希薄な影響の糸を、紡ぎ、手繰り、野放図に散らして、 不確かな時間と空間を「まるで共有しているかのような」 幻想を与えてくれるだろう。

これはわずか数人で行われる、たった 1 5 分間の、とてもわびしいコロナ時代のステージ。そして同時に、これはきっと、総勢 3 0 人による、総計 5 時間に及ぶ、きっとこれまで困難だったほどに壮大なグラン・サーカスでもあるはず。

"与"え、可"能"にして、取り戻すためのステージの幕を、 さあ、開けよう。一緒に。